

昭和初期の長野県南部山村における生活と育児： 伝統的ソーシャルサポートシステムとその現代的意義

多賀谷昭*1，野口眞弓*2

【要 旨】 昭和初期の長野県下伊那郡大鹿村上蔵地区における生活を，ソーシャルサポートと育児に焦点を当てて明らかにし，現代の育児をする母親とそのソーシャルサポートについて考察した．延べ51 5時間の非構成的インタビューで得られた記録を分析し，地理学的観察と文献資料によって検討した結果，上蔵では畑作，養蚕，炭焼き，水田耕作等，幅広い生業活動が営まれる中で，対等で相互的な近隣関係によって人々の生活が支えられていたこと，そのような生活様式は孤立性の高い山村における生態学的適応として捉えられること，また，育児は母親だけにその責任が帰されることなく，他の家族員や親族，近隣の共同によって成立していたことが明らかになった．社会関係に見られるこれらの特徴は，階層的な同族関係とは異なる対等な相互扶助関係に基づくコミュニティの構築や，育児をする母親の支援を考えるための示唆を与えるものである．

【キーワード】 山村，生業活動，出産，育児，ソーシャルサポート

はじめに

育児に行き詰まった母親の問題が大きな社会的関心を集めている．育児不安という現象は1980年代に研究者の注目する所となり，牧野（1982）は育児不安をストレスとして捉えた．その後さまざまな心理学的な研究により，ソーシャルサポートが育児不安を軽減することが明らかにされている（川井，庄司，千賀他，1994；坂間，山崎，川田，1999）．しかし，ソーシャルサポートを手に入れることは制度というよりも個人的なつきあいの範疇で解決されている場合が多く（牧野，1982；榎本，福本，堀井他，1999），行政の育児相談や乳幼児クラスの開催，ピアサポートグループの育成などが試みられてはいるが，核家族化，少子化，人口流動性の増加などにより，育児をする母親にとってソーシャルサポートはますます得にくいものになっている（野口，新川，多賀谷，2001）．

本研究の対象とした昭和初期の大鹿村は，上のような現代日本の一般的状況とは正反対の環境にあり，育

児の観念も全く異なっていた．それは我々が直面している問題とは何のかかわりもないように見える．しかし，大鹿村の社会関係の多くは，現在も本質的には変化していないように思われる．それはなぜであろうか，また，そこから出産・育児を行う母親と社会のあり方を考えるための示唆が得られないであろうか．このために，民族誌学的方法により当時の人々の生活を復元し，現代の出産・育児をとりまく状況との比較検討を行いたい．

対象と方法

長野県下伊那郡大鹿村における昭和初期の生活を，ソーシャルサポートと育児に焦点を当てて調査した．聞き込みによる予備調査を1999年6月に行った後，主要なインフォーマントに対する非構成的手法によるインタビューを1999年6月から12月に行い，さらに，隣接地域の状況と比較確認するためのインタビューを2000年9月から12月に行った．また，インタビューの

*1 長野県看護大学 *2 日本赤十字広島看護大学（前長野県看護大学）
2001年12月17日受付

内容の確認と補助的資料を得るための地理学的現地踏査を1999年5月から2000年4月にかけて行った。

インタビュー対象者を表1に示す。対象者の選定は、昭和初期に育児を経験した農家の女性という条件で大鹿村役場から上蔵(わぞ)地区に住むTMさんを紹介してもらい、さらにスノーボール・サンプリング法で上蔵地区に関する他のインフォーマントを得た。主要なインタビューは、TMさんを中心に、その知り合いで同じ地区に住む女性のMYさんとIKさん、TMさんの娘のAKさんと息子のMMさんを対象とした。TMさんとのインタビューでは、毎回最初に前回の内容の確認や関連する質問を行った。さらに隣接地域での状況と比較確認するためのインタビューは、大鹿村鹿塩地区で山仕事を生業にしていたHNさん、下伊那郡喬

木村在住のCKさん、上伊那郡長谷村出身のTNさんに行った。インタビューのうち生活一般に関する部分は多賀谷が、出産育児に関する部分は野口が主に担当した。また、予備調査の段階で、大鹿村の保健医療従事者に対して主に出産と育児について半構成的なインタビューを行った。

インタビュー記録は、インタビュー中にメモを作成し、終了後直ちに文書化した。主要部分であるTMさんのインタビュー記録については、息子の妻でインタビューに毎回付き添ってくれた同じ大鹿村出身のKMさんに内容の確認を依頼した。分析では、主要なテーマごとに記録をまとめ、比較資料とともに検討した。なお、ここでいう「昭和初期」は、一応第2次大戦前の時期を想定しているが、インフォーマントが昔の経験として語った時代のことであり、大戦直後のことまで含まれている可能性がある。しかし、語られたことからはインフォーマントにとってまとまりのある過去の世界の一部として認識されていたと判断されたので、敢えて暦年で区切ることはしなかった。

表1. インタビューの対象者 対象地域 回数 時間

インフォーマント			インタビュー		
略号	性別	生年	対象地域	回数	時間(hr)
TM	f	1914	大鹿村(上蔵)	13	34.0
MY	f	1925	大鹿村(上蔵)	3	4.5
IK	f	1907	大鹿村(上蔵)	1	1.5
AK	f	1941	大鹿村(上蔵)	1	1.0
MM	m	1944	大鹿村(上蔵)	2	2.5
HN	m	1939	大鹿村(鹿塩)	1	1.5
CK	f	1920	喬木村	2	4.0
TN	m	1927	長谷村	1	2.5
計 5f+3m				24	51.5

調査対象地域の地理的および歴史的背景(図1)

大鹿村は、赤石山脈(南アルプス)と伊那山地との間の中央構造線に沿う谷間に広がり、村の大部分を占める赤石山脈の西斜面は地滑りの多発地帯で、耕地の

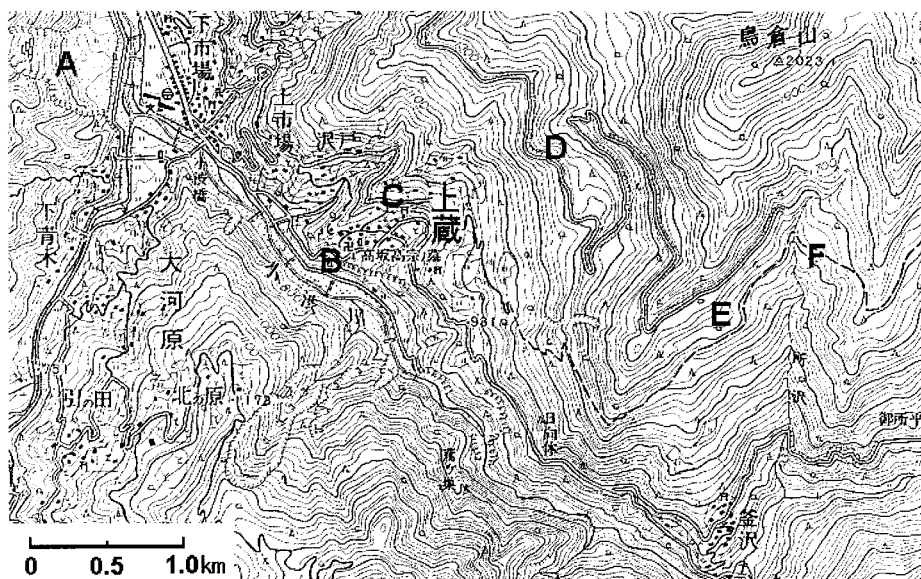


図1 上蔵地区周辺図。Aの大西山公園は三六災害による大西山崩壊跡で、地下に集落が埋まっている。比較的新しい地滑り跡はこの他、上蔵の対岸の山腹、草刈り場への道の途中、小渋川河岸などにも見られる。Bは福德寺、Cは野々宮神社、Dは黒岩、E～Fは炭焼きをした場所、Fは草刈り場を示す。(国土地理院昭和59年発行1:50,000地形図「大河原」を使用した。)

多くは地滑りで生じた土壌を利用した畑である（松島，1984）。このため，ほとんどの畑は傾斜地で，主に大麦と大豆が生産されて来たが，調査対象とした昭和初期には養蚕が主な生業の一つで，農地改革前の畑3,590反の38.4%，1,380反が桑畑であった（大鹿村誌編纂委員会，1984b: p.409）。耕作地以外の傾斜地にはブナ科を中心とした多様な樹種からなる落葉広葉樹林か，ヒノキやカラマツの植林，尾根筋にはアカマツの自然林，谷筋にはサワグルミが多い。落葉広葉樹林では昭和30年代まで炭焼きが多く行われ，現地踏査でも炭焼窯の痕跡を認めた。

住居は標高700ないし800mの谷筋から標高約1,100mの傾斜地に小集落をなして存在し，戸数と人口は，昭和初期から戦後まで1,000戸，5,000人前後を維持していたが，1961年6月末の大水害（図1: Aの説明を参照）を境に過疎化が進み，1995年現在641戸，1,641人

表2．インタビュー記録の内容の分類

分野*	事項*
1 生業	
1.1	養蚕
1.2	畑作
1.3	炭焼き
1.4	水田耕作
1.5	草刈り
1.6	屋内での仕事
1.7	その他の生業活動
2 相互支援関係	
2.1	部落全体の相互扶助
2.2	近隣関係（ジッコウとクミアイ）
2.3	結
2.4	利水に関する相互扶助
2.5	雪かき道・掃除道
2.6	金銭との交換による扶助
3 日常生活	
3.1	食事
3.2	服装
3.3	洗濯と入浴
3.4	娯楽
3.5	医療
3.6	宗教
4 出産と育児	
4.1	出産
4.2	子どもの地域社会からの承認
4.3	子育て
4.4	子どもの生活

* 対応する番号の本文中に詳細を記載

となっている。耕地面積は1995年現在2.8km²にすぎないが，1944年には現在の2倍近い548.9町（5.44km²）であった（大鹿村誌編纂委員会，1984b: pp.269-270）。他地域との交通路は，中央構造線に沿う道が鎌倉時代から開けたが，昭和初期には小渋川に沿って松川町や飯田市方面に向かう道が主であったようである。

主な調査地である大鹿村大河原上蔵地区は，標高約840mから900mの間に広がり，部落の下部には長野県最古の木造建築で鎌倉時代創建とされる重要文化財の福德寺（図1: B）があり，部落上部にある野々宮神社（図1: C）の舞台では，昭和初期まで村人による歌舞伎が上演されていた。戸数は1999年現在44戸，インタビュー記録によれば昭和の初期にも40ないし45戸で，世帯数にはほとんど変化がない。大鹿村誌（大鹿村誌編纂委員会，1984b: pp.296-298）によれば，大河原地区は長男子相続制で，耕地の制約から分家は一般的でなく，特に上蔵ではカブによって家の数が決まっていた。

結果

昭和初期の上蔵に関するインタビュー記録の内容は，表2のように，生業（7項目），相互支援関係（6項目），日常生活（6項目），出産と育児（4項目）の4分野に分類できた。以下，各分野について概要を記し，さらに個別の事項をできる限りインフォーマントの用語を使ってまとめた。このうち，部落全体の行事と相互扶助の大部分は現在も大きな変化なく実施されている。また，比較確認のためにインタビューしたインフォーマントの証言や，山村での生活を記した回想記（西村，2000）から，隣接する山村でも当時の生活は上蔵と大きく異なる所はなかったと推定された。

1 生業

主な生業は，養蚕，畑作，炭焼き，水田耕作の四つで，TMさんの家でもこれら全てを行っていた。前二者は主に女性が行い，後二者は主に男性が行ったが女性も参加していた。農作業に馬を使用することが多く，冬場の飼料を得るために，秋に約5km離れた部落共有の草刈り場で男女がカヤを刈り取った。その場所までの道の維持管理は部落の男性の共同作業であった。水

田は畑に比べて少なく，TMさんの家でも現在耕作しているのは畑約1 haに対して水田は0.2 haである．

1.1 養蚕

5月の春子，6～7月の夏子，9月の秋子と，年に3回取った．餌の桑は主に女が採り，重い束を運ぶときだけ男手に頼った．桑は日の出前に刈り，6尺から9尺くらいの長さの束にして桑倉に運んだ．「夕方を早く飼う」と蚕が腹を空かせるので，遅く餌をやり，夕飯は9時頃になった．蚕棚の間で寝ることもあった．桑の採り方は季節で違い，秋子には葉だけを摘み，春子には同じ畑の若いズイキ（枝）を葉ごと「クワコキ」で刈った．「夏子畑」は，前年のズイキを八十八夜頃に元から切っておき，新芽の葉だけを「クワツミ」で採った．葉以外に，「桑切り鎌」で刈った芽を押切で短く切った「切り桑」も蚕に振りかけるようにして与えた．規格に合う繭はそのまま出荷し，他はクダやカセにして，出荷したり，黒や茶色の草木染めにして機で自家用の絹織物を織ったりした．

1.2 畑作

畑は女の仕事だった．上蔵の土は黒岩（図1: D）のあたりから崩れ落ちてきたと言い伝えられ，畑には石が多いが，石は斜面で土が流れるのを防いでくれる．野沢菜の畑は，土中で根を切って取り入れるため，石を取り除くが，とても取りきれない．畑には大麦の間に「ホグセ」という棒で穴をあけて大豆を植えた．麦刈りでは，間の豆を踏まないように素足ですることがあり，雨上がりにも，土を硬くしないように素足で入った．麦刈りは，麦を「こいで（引き抜いて）」踏みながら根を切った．麦のハザ掛けの頃は夕食が9時頃になった．麦の根は豆の肥料になり，麦藁はシマウリの下に敷き，また堆肥にした．

1.3 炭焼き

炭を焼くのは男で，11月から2月頃，井水から所沢，沢入あたり（図1: E-F）で焼いた．女は俵を編み，炭俵を背負って運んだ．雪が積もると運搬に木ソリを使った．炭焼窯を作る赤石や赤土は山で手に入れ，土を練る水は村から運んだ．窯は2～3年使い，近くに2間×1.5間の作業小屋と，1坪の泊まり小屋を作った．原料は直径10～15cm位のマキ（ミズナラやコナラ）で，焼けると7割位になった．TMさんの家の窯は

一度に13～14俵の炭が焼けた．作業は一人か二人で，まず4，5日かけて木を切り，1日で窯に詰め，1日「あぶり（原料が自己発火するよう窯口で火を焚き）」、窯口を赤土で塞ぎ，空気穴を作って3日間「蒸し焼き」し，煙の変化を目安に空気穴と煙突を閉じて3日待った．あぶり終わると次の木を伐った．出荷する角俵には揃えて切った炭を入れ，半端の炭は自家用の丸俵に入れた．

1.4 水田耕作

田植えは6月にした．苗代には人糞を足で踏み込み，荒代を掻いて固まりを溶かし，シバ（コナラやミズナラ等の若い枝）を入れた．シバは，MYさんの家では最初から田に入れ，TMさんの家では種もみを蒔いた後，押切で切って「フリシバ」にした．田植えは，馬でシバを鋤込んでから，綱を張って行った．馬の口取りは女もすることがあった．肥料には，蚕沙（さんさ，蚕が食べ残した桑の葉）や，乾燥させて壺に保存した蚕の糞，人糞を用いた．田にはフナやコイを飼うことがあった．

1.5 草刈り

10月1日の「山の口」から1週間が草刈りで，村の者は誰でも参加できた．夜明け近くに山の草刈り場に出かけ，刈る場所の輪郭を「刈りまわし」した．各家3～4人が出かけ，子どもは行かなかった．9月25日から皆で道作りをし，また小屋で泊まる支度をした．小屋は9尺四方で，芯棒を木，残りを草で作し，床には草を置いた上にムシロを敷き，布団を運んだ．刈ったカヤは1mほどで，下から20～30cmで束ね，3束の穂を束ねて1トヤとし，一日100トヤくらい作った．干したカヤは11月末頃，人と馬で家に運んだ．朝早く出て昼に戻り，午後も一往復した．人は，幅1m，高さ身長位の「背負（しょい）板」で一度に10トヤ運んだ．馬どうしが出会うと，「よけあい」といって荷を背負わない馬が道を譲った．TMさんの家の小屋は，夫の実家（上蔵内，ジッコウは異なる）と一緒に建てた．
<草刈り場跡の現地踏査結果>

上蔵から草刈り場跡までの道を1999年10月に著者2人で踏査した．道のりは約5kmで，草刈り場跡は標高1530～1600m，上蔵部落との標高差は約650mあるが，道の傾斜はほぼ一定で，比較的歩きやすかった．崖沿

いの木の足場は朽ち、地滑り帯では道が消えかかっていたので、徒歩2.5時間を要したが、共同作業で道を修理していた当時は2時間程度で歩けたと推定される。草刈り場跡としてMMさんが地図上に示した付近は平均斜度27度で土壌が発達し、植林されていたが、草刈りの適地と思われる範囲は直径200m程度であった。

1.6 屋内での仕事

夜は、裸電球のコードを移動できるように長くして釘にかけ、その下で夜なべ仕事をした。冬には、主に男はカヤでミノなどを作り、女はヨモギやクルミの皮を使って草木染めを行い、機織りをした。TMさんの家の機は、台所と桑倉の上の二階にある9尺四方くらいの部屋にあった。

1.7 その他の生業活動

9月の二十日頃には山のクルミを集めて蓄えた。藁や草をかけて半月くらい皮を腐らせ、桶に入れて板でこじりながら洗って皮を取り除き、1月半くらい乾燥させた。山で猟をする人もいた。猟期は主に冬で、銃や罠を用いて、ヤマドリ、キジ、ウサギ、シカ、イノシシ、クマなどを獲った。豆腐を作る家もあった。TMさんの夫は木挽きや馬の蹄鉄作りもやっていた。

2 相互支援関係

上蔵住民相互の社会的支援では、近隣関係が最も重要で、親族関係と結の制度がそれに次ぐものであった。家を単位とするこれらの関係の他に、個人単位で参加する青年団、婦人会、消防団等の活動があった。部落全体で行う野々宮神社の祭や福德時の年中行事にも近隣組織が関与していた。冠婚葬祭では、9ないし10戸からなる「ジッコウ(十戸の衆)」あるいは「トナリグミ(隣組)」と呼ばれる地縁集団あるいはその下部組織の「クミアイ(五戸組合)」によって相互扶助活動が行われ、他に家庭用水道や農業水道の維持管理のための仲間があった。また、明示的な制度としてのこれらの関係以外に、親類や近所の子どもの面倒を年上の子どもたちがみる等の相互扶助が行われていた。

2.1 部落全体の相互扶助

野々宮神社の春祭りは4月29日、秋祭りは10月12日で、部落長とジッコウ班長の他、氏子総代など世話人組を含む10人程度が中心になって催した。祭りの日の

午前中に道路の修繕をし、各家から男1人が出、出られなければ女が出た。ジッコウ毎に分かれて、道の草を刈り、くぼみを直し、側溝の土を出した。福德寺では、正月の7日の晩から8日にかけて「おこもり」をした。一晩中眠らずに陽が出るのを待つので「お日待ち」ともいい、夜中にお粥を炊いて皆で食べた。1月7日にお餅を作り、8日の朝まで“日見ずの薬師”様に供えた後、2枚ずつ各戸に配った。

2.2 ジッコウとクミアイ

ジッコウは現在5つあるが、元は4つだった。ジッコウの班長は1年交代の輪番制で、5人の班長から部落長が選ばれた。葬儀ではクミアイが式の段取りを行い、ジッコウが墓穴を掘った。各戸男女1人ずつ出て、女は主に食事の準備、男はお寺への連絡、火葬、役場の手続き、帳簿つけ等を行った。棺桶や位牌を作る材料は普段から準備しており、ジッコウが棺桶や位牌を作った。結婚式ではクミアイ衆が嫁入りのタンスを嫁ぎ先まで運んだ。式には親戚の叔父、叔母、本家は夫婦で招待し、クミアイ衆は各戸一人を招待した。11月23日頃の収穫祭では当番の家を宿にしてジッコウで食事をした。人参、ゴボウ、竹輪、きのこの入った味噌飯や五平餅などを作った。

2.3 結

結による相互扶助は、屋根の葺き直し、麦や米作り、地場直し、石垣作り等で、1950年代まで行われていた。

2.4 利水に関する相互扶助

共同の利水施設には、上下水道と農業用水があった。上蔵一帯は地下水位が高く、畑には特別な灌漑施設を必要としないが、山の田には草刈り場に近い「黒の田(クロンタ)」と呼ばれる場所から引いた「井水」の水を堤に溜めて使用した。草刈り場への道に沿って約4kmにおよぶこの用水路は、山の田を開くために1890年に有志者が敷設した(大鹿村誌編纂委員会, 1984b: pp. 682-683)。何れの施設も、それぞれ利用者が共同して維持管理を行っていた。

2.4.1 上下水道

木を持っている人がマツを提供し、木挽きのTMさんの夫が木を伐って、家庭用水の樋を作った。上樋と下樋があり、上樋は飲み水、下樋は生活排水用で、この造りのおかげで沢の下の家も清潔な水が使えた。樋

を共有する10軒程度で毎月1日と15日に藁をつけた棒で樋を洗った。

2.4.2 農業用水

山の田には、黒の田井水と堤の水を使い、井水の大部分は堤に蓄えた。田植えの前、水を使う仲間で堤の手入れをし、水神様のお祭りをした。堤から田に流す水の調節には、木の筒の横に穴をあけて堤に入れ、穴に差し込んだ「栓棒」を抜き挿した。TMさんの家では6軒で「水番」を回し、草刈りをしながら、水番仲間の田んぼの水を確認した。

2.5 雪かき道・掃除道

隣家との間の道や公道の雪かきや掃除は受け持ちが決まっており、家やジッコウの受け持ち部分をその「雪かき道」、「掃除道」と呼んだ。雪かきは棒の先に板が付いたもので行った。現在は大きな道には除雪車が入るが、小さな道の雪かきは今でもこの決まりに従ってやっている。

2.6 金銭との交換による扶助

みんな暮らしに精一杯だったが、決まっていることではお互いに助け合った。それ以外の農繁期の手伝い等には、お金を出した。大人に限らず、子どもの子守りにもお駄賃を出すことがあった。

3 日常生活

日常の生活については、食事、服装、洗濯と入浴、娯楽、医療、宗教に関することが語られ、それらの多くは、山の暮らしと密接に結びついていた。宗教に関する事項のうち、福德寺や野々宮神社の行事については「2.1 部落全体の相互扶助」の項に記載した。

3.1 食事

食事は、「朝作り」前に晩ご飯の残りを食べ、その後、朝ご飯、(1回目のお小昼(こびる)、お中飯(ちゅうはん)、(2回目のお小昼、晩ご飯の計6回食べた。食事には、茶碗2つと皿が入った箱膳を使用した。茶碗を普段はお茶ですすぎ、洗うときは沢に行った。普段の食事は、麦を3~5割混ぜたご飯と、大根や馬鈴薯、ネギなどの味噌汁に漬け物が付く程度だった。弁当は、木の「メンパ」にご飯を入れ、小さいメンパのような「ミソバチ」に味噌、味噌漬、梅干などのおかずを入れた。山仕事の時は、お小昼の分も一緒に詰めるので、メンパの蓋にもご飯を詰めて「合わせっこ」

にした。煮炊きはクドの釜と囲炉裏の鍋を使い、囲炉裏では焼き物もした。田で作った米(うちモチ米が2~3割)、畑で作った大麦と野菜を主に自家用にした。冬は根菜類を土間の一畳足らずのム口に保存した。

3.2 服装

男性は、さるまた、藍色の股引を履き、上には山半纏を着た。女性は、前掛けをして、木綿の着物を着た。寒い季節は綿入れを着、座布団に紐をつけた「ネコ」を背負うように身につけた。山仕事には、わらじを履き、足には「甲かけ」をつけた。これは厚い生地を縫って作ったもので、家に型紙があった。ミノには日除けに使うセミノ(背簞)と雨除けにするオオミノ(大簞)、草刈りに使うマエミノ(前簞)があった。お祭り、お正月、お呼ばれ、結婚式などの特別の時には、絹の着物を着た。

3.3 洗濯と入浴

週一回位、石鹸を使って沢で洗濯したが、豆たたき、麦たたき、おカイコ等のときは、汗をかいてもそのまま干すことがあった。風呂は3日に一度で、水は子どもか年寄りが沢からバケツで汲んで来た。釜は「へそぶる」から五右衛門風呂に変わった。乾燥させた「せいかち(サイカチの豆果)」を木綿の袋に入れて体を洗った。水が手に入りにくい家では、風呂の水を「焚き返して」何度も利用した。

3.4 娯楽

主な楽しみには、正月、お祭り、運動会があった。正月の3日目には里帰りをした。1枚2升分の餅を三つ折りにし、片親なら1枚、二親なら2枚背負って一晩だけ泊まりに行く決まりで、遠方に嫁ぐことは難しかった。春と秋の祭りには、白いご飯を炊き、魚を焼き、豆腐を食べた。小学校の運動会は10月の初め頃で、山に泊まって草刈りをしている親は前の晩に下りてきてお風呂に入り、運動会の支度をしてまた山に戻った。運動会にはおばあさんが見に行った。時には大人は花札をした。

3.5 医療

村に医師がいなかった頃は、中川村の医院まで病人を運んだ。薬は、富山の薬売りの置き薬を使っていた。畑仕事でひび割れた踵には、「あかぎれ膏」を塗り込んで焼け火箸を当てた。

3.6 宗教

みんな野々宮神社の氏子で、春・夏のお祭りとお正月には神社に行った。葬式はたいてい仏式で、神式は少なかった。病気、不幸が続いた時や、年一回の「お家祭り」には、祈禱師が呼ばれた。

4 出産と育児

妊婦は出産の直前まで働き、出産は近隣が援助した。育児には母親以外の家族員、特に高齢者の関与が大きく、年長の兄弟姉妹や近隣の子どもたちも育児に関わった。

4.1 出産

出産の手伝いは近所の人に頼み、いなければ、夫が出産の介助をすることもあった。6回出産したTMさんは陣痛が始まるまで働き、出産間近に隣のおばさんと呼び、家屋内の桑倉にあった50cm四方のやぐら炬燵に摺まり、しゃがんで出産し、出産後3日で水汲みを始めた。臍帯は、手一束(4横指)で縛って切った。臍の緒を保存する習わしはなく、胎盤を紙で包んでお墓に埋めた。

4.2 子どもの地域社会からの承認

TMさんは子どもたちの初節句の祝いをした。男の児は5月5日、女の児は4月3日に親類、仲人、両隣を呼んでお祝いをした。長男の初節句では、鯉のぼりと武将を描いた家紋入りののぼりを掲げる習わしで、次男、三男の初節句には鯉のぼりを買足した。女の児の初節句では、板びなを飾り、お嫁に出すときに持たせた。これらは子どもの親か母方の実家が購入した。

4.3 子育て

乳のみ児がいる母親も、午前4時半頃から「朝作り」に行き、年寄りが朝食の支度を行った。子どもの面倒は年寄りや年長の子どもが見、母親は食事時に乳を与える程度だった。おしっこは年寄り衆が時間をみて「放(ひ)らせ」、洗濯は母親が昼休みに川で行っていたが、仕事が忙しい時は、オムツを洗濯せずに「干しつけ」、そのまま当てていた。お誕生頃まで家の中では「イズミ」というワラで編んだかごに入れ、田や畑ではムシロの上に寝かせた。少し大きくなると、家の中で動き回らないようにひもで柱に縛ることもあった。年長の子どもは子守りをし、5歳も年上なら下の子どもを背負って遊んだ。忙しい時には、親戚でもクミア

イでもない近所の家の子守りをしてお駄賃が出ることもあった。

4.4 子どもの生活

小学校の高学年は午前8時から夕方まで、低学年は昼頃まで学校で勉強をした。子守りをしながら学校に行く生徒もあり、子どもが泣くと教室の外に出た。弁当は、アルミニウムの弁当箱に漬け物、梅干、生味噌に鯉節の「削りこ」を混ぜたものを入れた。水筒はなく、ご飯の後は井戸で水を飲んだ。学校から戻ると、座敷や庭の掃き掃除、田んぼの草刈りなどの手伝いをしたが、遊びも盛んで、石やガラスのおはじき、陣取り、「ちんぱたん」という、片足を上げたり両足を広げたりして前進し、後ろ向きで投げた石が落ちた場所により得点を競う遊びをした。男の児は、コマ、木の三輪車、スキー、メンコで遊び、女の児は、子どもを背負って稲を干す八ザの上を歩いた。夜は電灯の下で百人一首をした。また、福德寺の周りを七回半回ると「白女」が出る、ミヤガの前の坂には「やかん転がし」が出るといった話を怖がった。

考 察

TMさんは出産直前まで働いていたと語っている。鎌田、宮里、菅沼他(1990: p. 64)によれば、当時、日常生活での労働は出産直前まで続け、できるだけ身体を動かすことが推奨されていたという。家屋内の出産場所は、全国的に納戸が多く、その理由として、薄暗さが産婦を鎮静させることや、家の大切なものを保存し夫婦の寝室ともなるので家の子どもの出産にふさわしいと見なされたことが指摘されている(鎌田、宮里、菅沼他、1990: pp. 115-116)。TMさんが出産した桑倉も、奥座敷の横に位置し、夫婦の寝室になる点で、納戸と同様の機能を持つ場所であった。また、胎盤を墓地に埋めることも一般に行われていた(鎌田、宮里、菅沼他、1990: pp. 194-195)。つまり、出産直前まで働くことや出産場所や後産の処置については、日本の他の地域と特に異なる点はないといえる。

一方、TMさん自身が具体的な臍帯の切断方法を易々と語ったことは、当時の上蔵では出産介助が女性の相互扶助として普通に行われていたことを示してお

り、さらに、夫が手伝う場合もあったということから、そのような知識が男性にも共有されていたことが判る。これらには、知識が局在せず各個人が多様な活動に携わるという山村生活の特徴が現れている。

出産は今日では主に夫婦ないし家族内の出来事と認識されているが、かつては生まれてくる子どもに対する地域社会の承認を得るために出産前後にさまざまな通過儀礼が行われた（鎌田，宮里，菅沼他，1990: pp. 242-249）。TMさんが両隣を招いて行った初節句の祝いもそのような習俗の一つと位置づけられる。

子どもの生活では、昭和前期にはゼンマイ仕掛けの金属製玩具が労働者階級の子どもたちにも普及したが（上，1991: p.253），都会から遠く離れた大鹿村には届いていなかったと見え、年長の子どもが年少の子どもを背負いながら学び、大人を手伝い、遊んでいた。多様な年齢の子どもが触れ合い、ルールのある対人遊びや大人の手伝い等を通じて、対人関係の取り方、社会の約束、役割等を学べたその状況は、子どもの社会化の面で非常に好ましい環境であったといえる。

昭和初期に当時の大鹿村と同様の生業形態を取っていた山村の3部落で1975年に行われた住民の意識調査の結果（中野，1997）によれば、a）近隣づきあい、b）親戚づきあい、c）友人づきあいの重要性の順序についての回答は、何れの部落でもa、b、cの順で、かつ、人口移動の少ない部落では、90%以上が近所づきあいの程度を親密なつきあいであると答えた。したがって、上蔵にみられる近隣関係の重視は、孤立性が高い山村の小集落という生活環境に共通する特徴と考えられる。

松山（1986）は、山村のプロトタイプを提案し、その特徴としてsubsistence economyがきわめて広いスペクトラムを持ち、その多様な生業活動のすべてに各世帯、場合によっては各個人がかかわることをあげ、そのような典型的な山村では戸数35戸、人口170人程度が限度であるとしている。上蔵の場合、多少の水田耕作があるので典型的な山村とは言えないが、水田面積は畑に比べて圧倒的に小さく、炭焼きを行う家が多く、さらに、焼畑や焼畑と常畑の中間的な形態である切替畑が多く作られていたこと（大鹿村誌編纂委員会，1984a: p.361）や、耕作と同時に木挽きや蹄鉄作り、

猟、豆腐作りをする人がいたこと等にみられるように、subsistence economyのスペクトラムはきわめて広く、松山の第3類型である焼畑山村のものに近い。すなわち、上蔵の戸数は生態学的にもほとんど上限に近いものであった可能性が大きく、戸数を制限するカブの慣行は、生態学的な適応の社会的具現化の一形態と考えることができる。

以上のことから、上蔵における近隣関係を主体とする相互扶助は、孤立的な山村の小集落というその環境においてsubsistence economy上の必然性をもつ適応的なものであったと考えることができる。このような社会関係のあり方は、自由な個人を基盤とする西欧流のコミュニティとは異なるが、対等な関係に基づく点ではそれと共通し、日本の農村に一般的な本家・分家の階層的な同族的結合に重点を置く共同体社会（木下，1966 / 1991）とはかなり様相を異にしている。

インタビューでも触れられているように、ジッコウは昭和10年代に4班から5班に改組されており、元のは地縁関係以外に地主・小作関係を含み、さらに本家・分家関係が入って来て地縁集団として機能しなくなったため、地縁関係のみに基づくものに改められた（大鹿村誌編纂委員会，1984b: pp. 292-293）。現代の上蔵においても、過疎化と住民の高齢化のために伝統的な相互扶助システムの一部の機能に支障をきたし、それに対応した変化が起こっている。例えば、葬儀を取り仕切るのはジッコウだけでは難しくなっており、範囲を拡大して部落全体で取り組もうとしている。また、ジッコウの何れかの家に集まって祝っていた収穫祭にも、村内の民宿等が使用されるようになってきた。

このようにジッコウ、クミアイ等の近隣関係に重点をおく社会関係は本質的には変化せず、状況に合わせた再構築が随時行われて来たと言える。このような共同体が今日まで維持されてきたのは、孤立的な地理的環境のためだけではなく、階層的な同族関係よりも対等で相互的な近隣関係に重点をおく共同体の統合原理が現代精神と一定の整合性をもつことにも一因があると考えられる。

現代の母親たちは、経済的な余裕と個人の幸福を追求する自由を手にはしているが、育児に関しては過大

な責任感に押しつぶされそうになっているように見える。特に職業を持っていない母親の場合、状態はより深刻である（牧野，1982；島田，松浦，宮原，1990；山崎，1997；光岡，小林，奥田也，1999；坂間，山崎，川田，1999；両角，角間，草野，2000）。一方、インタビューの結果によれば、昭和初期の大鹿村においては、母親も他の家族員も生きることが精一杯の生活を送っていたが、育児の責任は母親個人でなく家族員全員に分有され、近隣関係や親族関係によっても支えられていたため、育児に関する悩みは比較的少なく、子どもの社会化の過程も現代の日本の多くの子どもたちよりはるかに順調であったと考えられる。

個人の幸福の追求と共同体による生活の保障とをどのように適合させるかは、市民社会の基本的な課題である。育児に関してこの問題を考える場合、育児の責任を母親一人に背負わせない山村の共同体のあり方は重要な示唆を含んでいる。すなわち、母親を育児の主体としてその援助を考えるだけでは、追いつめられる母親の問題は解決できないであろう。問題は、現象の捉え方の枠組み自体にもある。育児をする母親と家族やコミュニティの関係だけでなく、必ずしも母親を媒介としない子どもと家族やコミュニティとの関係まで視野に入れた施策や援助方法の検討が必要であろう。

山村の生業活動と社会関係のあり方は、知識や技術が共同体の一部の成員に局在せず各世帯や個人が多様な活動に参加する能力を保持することが対等な相互扶助関係を可能にすることを示唆している。そのような能力が失われて高度に専門化した社会では、互酬性・相互性は経済行為としてのみ存在し得る。専門化は現代社会の宿命であるが、その中において個人が多様な能力を保持することの意味を、コミュニティの構築の条件という視点から評価し直すことが望まれる。

謝 辞

この研究のための調査にご協力を賜ったすべての皆様に心からの謝意を表したい。特に、聞き取り調査に毎回根気強くお付き合い下さったインフォーマントの方々とそのご家族のご協力がなければ研究を行うことは不可能であった。二人の査読者の有益なご批判とご

助言にも深謝申し上げる。この研究は、科学研究費補助金（課題番号11672384）を受けた「出産および育児に関するソーシャルサポート・ネットワークの研究」の一環として行った。

文 献

- 鎌田久子，宮里和子，菅沼ひろ子，古川裕子，坂倉啓夫（1990）日本人の子産み・子育て - いま・むかし - . 勁草書房，東京。
- 上笙一郎（1991）日本子育て物語 育児の社会史 . 筑摩書房，東京。
- 川井尚，庄司順一，千賀悠子他（1994）育児不安に関する基礎的検討 . 日本総合愛育研究紀要，30: 27-39 .
- 木下謙治（1966）農村社会学における構造の概念について / (再録改題) 農村社会学における構造の概念 . 木下謙治（1991），家族・農村・コミュニティ . 140-159，恒星社厚生閣，東京。
- 牧野カツコ（1982）乳幼児を持つ母親の生活と 育児不安 . 家庭教育研究所紀要，3: 34-56 .
- 榎本妙子，福本恵，堀井節子他（1999）育児不安の実態と関連要因の検討（第2報） . 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，8: 163-172 .
- 松島信幸（1984）地質 . 大鹿村誌編纂委員会編，大鹿村誌下巻，127-205，大鹿村誌刊行委員会，長野県下伊那郡大鹿村。
- 松山利夫（1986）山村の文化地理学的研究 . 古今書院，東京。
- 光岡摂子，小林春男，奥田昌之他（1999）乳幼児を持つ母親の育児不安 . 体力・栄養・免疫学雑誌，9: 30-39 .
- 両角伊都子，角間陽子，草野篤子（2000）乳幼児をもつ母親の育児不安に関わる諸要因 - 子ども虐待をも視野に入れて - . 信州大学教育学部紀要，99: 87-98 .
- 中野三郎（1997）村落における共同体意識の変化 . 西村洋子，大梶俊夫，森幸雄編，人間と地域社会: 21世紀への課題 . 1-43，学文社，東京。
- 西村富夫（2000）来し方七十年 . 私家版，松本市。
- 野口眞弓，新川治子，多賀谷昭（2001）育児をする母親のソーシャル・サポート・ネットワークの実態 . 日

本赤十字広島看護大学紀要, 1: 49-58 .

大鹿村誌編纂委員会編 (1984a) 大鹿村誌上巻 . 大鹿
村誌刊行委員会, 長野県下伊那郡大鹿村 .

大鹿村誌編纂委員会編 (1984b) 大鹿村誌中巻 . 大鹿
村誌刊行委員会, 長野県下伊那郡大鹿村 .

坂間伊津美, 山崎喜比古, 川田智恵子 (1999) 育児ス
トレインの規定要因に関する研究 . 日本公衆衛生雑
誌, 46: 250-262 .

島田三恵子, 松浦賢長, 宮原忍 (1990) 育児中の母親
の不安に関する研究 - STAI 得点と属性等との関連 - .
母性衛生, 31: 221-228 .

山崎あけみ (1997) 育児期の家族の中で生活している
女性の自己概念 - 「母親としての自己」・「母親とし
て以外の自己」の分析 - . 日本看護科学会誌, 17:
1-10 .

【Summary】

Daily Life and Child Rearing in a Mountain Village in Central Japan Before the Second World War: A Traditional Social Support System and Its Implications for Modern Child Rearing

Akira TAGAYA *¹ and Mayumi NOGUCHI *²

*¹ Nagano College of Nursing

*² The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

Social support for child rearing mothers was considered on the basis of the findings about various aspects of daily life and childbirth and child rearing in Ohshika Village, Ina Valley, Nagano Prefecture, before the Second World War. The data were collected through 51.5 hours of interviews with 8 informants and geographic inspection at subsistence activity sites. These data were analyzed together with historical records. The results indicate that 1) the primary social structure there was the neighborhood relationship based on equality and reciprocity embodied by the “jikko” (ten-household group) and the “kumiai” (five-household group) 2) the diversity of the subsistence economy of the village (coexistence of slope cultivation, sericulture, charcoal making, rice cultivation, fodder gathering, etc.) testifies to the long history of ecological adaptation to the mountainous environment; 3) the “kabu” system that limited the number of households can be regarded as a social manifestation of such adaptation; 4) the duty of child rearing was shared by all household members and supported by the neighborhood, in contrast to the situation of modern Japanese mothers who suffer from too much responsibility and insufficient social support; and 5) that every individual and household in the community maintained the capacity to perform various activities could be a major factor enabling the equality and reciprocity of its social support system. Implications of these findings for social support for child rearing mothers are discussed.

Keywords: mountain village, subsistence, childbirth, child rearing, social support

多賀谷 昭 (たがや あきら)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
Akira TAGAYA
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: tagaya@nagano-nurs.ac.jp